

仙台教区 復興支援活動ニュースレター

4→6・45通信

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL 022-222-7371 FAX 022-222-7378
義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局

「こびっとプロジェクト」といわき教会の「チーム平・堂根」の活動は、1つの教会ではできなくても山梨地区の教会が力を合わせることで、またいろいろな組織や団体と共に継続する支援活動ができるというヒントが得られます。また、横浜教区の藤沢教会は、教会として「東北ボランティア活動サポートチーム」を組織して、支援の活動をしていただいています。どの教会も知恵と力を出し合って助けてくださっていることに、心から感謝しています。

「こびっとプロジェクト」に参加して

カトリック甲府教会 木村 正子

こびっとプロジェクト責任者の池田さん、宮澤さんとともに、被災地復興支援基地である仙台教区サポートセンター/カリタス石巻ベースに、9月15日から3泊4日の日程で行って来ました。片道6時間半、長時間にしてはそれほど疲れを感じなかったのは、同行の方のさりげない優しい気配りによるものでした。



石巻ベースに到着。「こんにちは！」そこにはスタッフ皆さんの満面の笑顔でのお出迎えがありました。あたかも我が家に戻ってきたかのように感じたのは、私だけではなかったようです。ベース長のSr.細谷は開口一番、当プロジェクトの呼び名が「こびっとプロジェクト」に決まったことを、殊の外喜んでくださいました。

石巻ベースでのボランティア活動に初めて参加する人は、まず始めにベーススタッフからオリエンテーションを受けることになっています。ボランティアの心得として「共に寄り添う」という精神、人と人のつながり、被災者の方々とゆっくり時を過ごすことを大切にすることなどのレクチャーを受けました。

夕方からは一日の振り返り、分かち合いがあり、スタッフ・ボランティア全員が集まり、一日の流れにそってその日の活動、感想を述べ合います。



2日目は、朝のミーティングで一日の活動分担を確認し合い、活動に入ります。

私たちは、ひびき工業団地仮設集会所で、仮設住宅の住民の方々との出会い・交流の場づくりのためのお茶会に参加しました。途中からボランティア4名は、被災者の語り部である武田さんより大震災当日の様子を生で聴かせていただきました。仮設住宅の方々は、その日17名参加され、日頃はあまり話さない震災当日の想像を絶する津波の凄さについて話していただきました。またの再開を楽しみにして夕方解散。

3日目、午前中はSr.細谷の案内で石巻ニューゼを見学。そこでは、震災当時の手書き新聞、写真などが展示され、あの日の凄まじい悲惨な姿の映像が再び痛みと悲しみを呼び戻します。報道部長さんのお話では、震災当時は当然ながら三年半経った今また、自死する人が増えているとのこと。心のケアがこれからの課題であると話されていました。そのためにも医師やカウンセラーの役割はもちろん、関わる人々の寄り添いが大切であると言われた言葉が心に残ります。

午後は、火事で消失した門脇小学校脇の花壇の整備、草取り。花壇の横道は被災者の方々が散歩や用達で通りますが、みなさんがシスターに話しかけていきます。シスターはその都度、手を休め、優しい眼差しでゆっくり1人1人の話を聴き続けます。

これぞ傾聴ボランティアのお手本、直に学ばせてもらいました。

4日目最終日は、大街道脇の花壇の整備と草取りをし、昼食はシスター手作りの美味しいチャーハンをいただき、帰路に着きました。

帰り際、スタッフの皆さんが着慣れたお揃いのTシャツ姿で「またね」といって、大きく手を振ってくださいました。そのTシャツの後ろには、このように書かれていました。

2011.3.11
Always be with you



～山梨地区カトリック教会東北被災地支援プロジェクト（こびっとプロジェクト）より～

昨年9月、東北被災地にて山梨地区カトリック教会合同視察を行いました。実際に被災地を訪問したメンバーは、被災された方々のことを忘れることなく寄り添っていくことの大切さを強く感じました。被災後3年が経過し、ボランティア活動への応募は激減しており、特に平日の活動人数が少なく、困っているのが現状でした。そこで、山梨地区カトリック教会では、「山梨地区カトリック教会 東北被災地支援プロジェクト」という名のもとに、2014年7月より「東北被災地支援活動」として、ボランティアの派遣をスタートすることにいたしました。

☆こびっとプロジェクトの名称について☆

ボランティアを派遣しているカリタス石巻ベースでは、「山梨地区カトリック教会 東北被災地支援プロジェクト」という名称が長いため、「こびっとプロジェクト」という愛称で呼んでいるというお話をお聞きました。

あるとき、当プロジェクトのボランティア参加者と石巻ベーススタッフとの会話の中で、甲州弁が使われているNHK朝の連続ドラマの話が出たそうです。そこで、ボランティア参加者がいくつかの方言（甲州弁）について説明をした中で、「こびっと」という言葉が特に気に入ってもらえたことから石巻ベースで「こびっとプロジェクト」という愛称がついたのだと思います。（「こびっと」は、しっかり・きちんと、と説明したような気がします。）

このような経緯から、プロジェクト名を短く親しみやすい「こびっとプロジェクト」という名称にすることにいたしました。



音楽ボランティア・石巻へ

プリエ・アンサンブル(藤沢教会音楽愛好者有志のグループ)

澄み切った秋の空に励まされて、10月30、31日の2日間、ピアノ、バイオリン(2名)、ボーカルの4名で、カリタス石巻ベースのご紹介により、石巻ベース、日本キリスト教団栄光幼稚園、トータルサポートセンター「夢みの里」の三カ所での音楽ボランティアに行かせていただきました。

カリタスベースのサロン、教会のお聖堂、広々としたフロアを会場に、同世代の方々の温かさ、幼稚園児たちのかわいいエネルギー、何が始まるのか、と興味津々の目に後押しされ、ご挨拶の「愛の挨拶」に始まって、お祈りの「アヴェマリア」、映画音楽、誰もが口ずさんだ唱歌、青春歌謡、アニメソング、童謡など、それぞれの場所で、約1時間ほどの音楽の交わりのひとときを楽しみました。



外国の曲も日本の歌も、上手に言い表せない深い心の中の思いをリズムやメロディが昇華させてくれるのでしょうか。ステージのあとは、何か心が通い合ったような親しみが感じられました。一緒に歌い、踊ってくださった方々、上手にリズムをとってくれた子どもたち、フリをつけてくれた若者、どちらも初めて伺った私たちを優しさで温かさ一杯で迎えてくださり、言い表しのない苦しみから生まれたこの交わりがこれからも続いていきますように、との思いを強く持ちました。

今回のプリエ・アンサンブル(「プリエ」とはフランス語の「祈り」)による音楽ボランティアは、信徒によるボランティア活動の一環として、2013年4月の石巻ベース、2014年4月の福島県南相馬市原町ベースに続いて3回目になります。

藤沢教会には、このような信徒によるボランティア活動をサポートするために「東北ボランティア活動サポートチーム」というものがあります。

2011年3月11日の大震災発生以来、藤沢教会では募金活動、チャリティーコンサート、ミニバザー、被災現場でのボランティア活動への参加など様々な形で被災地への支援活動が行われてきています。このような信徒のボランティア活動を推進・継続し、より多くの信徒が活動に参加できるようにとの思いから、2012年7月に教会委員会に直接ぶらさがる独立した組織として「東北ボランティア活動サポートチーム」が発足しました。

チームは、大震災発生以来、被災地の支援に関わってきた信徒を中心に6名のメンバーで構成され、①被災地（岩手・宮城・福島）における様々な形でのボランティア活動への参加 ②被災地の産物（特に風評被害に苦しむ福島の野菜、果物や、工場が被害を受けた石巻の味噌、醤油など）の販売（毎月第2日曜日に教会で販売しています） ③福島県の子供たちが夏休み、冬休みなどを利用して湘南地区に保養のために来たときのお世話など、主に3つのボランティア活動を対象に、被災地の情報収集、現地との調整、ニーズの発掘、活動に必要な交通費、搬送費の補助など資金的な面からもサポートもしています。また、被災された方をお招きし、当時の様子やその後の状況などお話をさせていただいたりもしてきました。

大震災からすでに3年8か月が経過した今、被災地を訪れますと、町の中心部では瓦礫の処理も終わり新しい街づくりが始まりつつあることがわかりますし、街にも徐々に活気が出てきていることも実感できます。しかしながら一方では、災害復興住宅の建設など復興事業計画は予定通り進んでおらず、大勢の方々が今もなお仮設住宅や遠く故郷を離れた避難先での生活を余儀なくされ、いつ元のような生活を取り戻すことができるのか、見通しの立たない中で不安な日々を過ごしておられます。まして原発事故による放射能汚染に苦しむ福島県ではいまだに何も手がつけられない状態の地域もあります。このような状況の中で私たちはこれからも被災地・被災者の方々のことを忘れることなく、私たちができる形での支援活動を継続していきたいと思っています。



懐かしい人々と一緒に 砂子田・秋まつり

カトリックいわき教会 「チーム平・堂根」

佐々木 三代子

11月16日、よい天気恵まれ、砂子田秋まつりを楽しむために、内郷雇用促進住宅に住むいわき市の津波被災者の方々が、午前11時の開催前から集まり始め、準備に余念のないカトリックいわき教会のボランティアグループ「チーム平・堂根」の人々に話しかけたり、各テントを回り、何を最初に食べようかと話し合いながら、にこにこ歩き回っています。

午前11時、開会の力強い触れ太鼓の音とともに、「砂子田秋まつり」が始まりました。開会の挨拶のあと、自治会長の橋本さんが、「私たち、この内郷のみなし仮設住宅の住民は『チーム平・堂根』のみなさんの毎月2回のサロンとこの炊き出しイベントに、震災以来、ずっと支えられてきました。どう感謝しているのか言葉もないほどです。今日も、本当にありがとうございます」と感謝の言葉を述べられました。次いで平賀司教が、「皆さんにお会いできるのを楽しみに、仙台からやって来ました。今日は、ゆっくり、楽しんでください」と挨拶し、砂子田秋まつりが始まりました。



今回も、「チーム平・堂根」の協力者たちが、各地から駆けつけました。まず、和歌山からはせ参じた「聖ビンセンシオ・ア・パウロの愛徳姉妹会」の3人のシスターたち。前日から湯本教会に宿泊し、「関西風お好み焼き」の買い物から始め、買って来た具材を切ったり、洗ったりの準備に大忙しでした。

今回初めての「関西風お好みや焼き」でしたが、大変な人気で、開会宣言前から長蛇の列ができ、終わりまでそれが続きました。

次に、最初からこの砂子田さつきまつり、秋まつりを支援している、横浜教区カトリック大和教会のボランティアの信徒たちが、チャーターしたバスで到着しました。車から降り、さっそく料理の準備にかかります。フランクフルト・ソーセージとパンです。彼らは、ペルー、フィリピン、日本の混合チームで、炊き出しだけでなく、踊りに歌に、大活躍でした。特に、2年前は子どもたちで、ペルーのダンスを披露していた2人の女の子は、この3年の間に1人で踊るダンスの大会でそれぞれ優勝し、見事な踊りを披露し、大拍手を浴びていました。



会津若松のボランティアチーム「あかべこ」は、福島ダルクさんと一緒に、「焼きそば」を作りました。毎回、テントの位置は少しずつ変わりますが、今回は、一番はずれの場所になりました。しかし、「焼きそば」は強い！準備した280食は完売でした。

福島ダルクは、飯豊権現太鼓を披露し、それを聞いている子どもたちも、お箸をばち代わりに一緒に叩いている姿が人々のほほえみを誘いました。

シャルトル聖パウロ修道女会のシスターたちは、手作りの和菓子といなり寿司のプレゼント。シスターたちの手作り和菓子は、「和菓子屋さんで買ったものでしょ？」と尋ねられるくらいのすばらしいできばえで、皆さんにっこり。

聖パウロ女子修道会のシスターは、幼児向け絵本とカレンダーを持参し、子どもたちの年齢にあった絵本を、笑顔と一言のやさしい言葉とともに、配りました。



「チーム平・堂根」の砂子田祭りのすばらしいことは、仮設に住む被災者の方々も共に炊き出しをする点です。今回も「豊間チーム」「久ノ浜チーム」とそれぞれ、被災前に住んでいた地区の名前をつけ、さんまのつみれ汁やごはんなどを提供。大鍋4杯のつみれ汁も完売しました。もちろん、「チーム平・堂根」もカフェコーナーで大活躍いたしました。

昼食が一段落したところで、フラダンス、ペルーの踊り、太鼓演奏があり、これも恒例になった、子どもたちが大好きな大道芸と「平賀司教様とするじゃんけん大会」で大いに盛り上がりました。

最後は、テーマソングになっている「若者たち」と「ふるさと」を全員で歌い散会しました。

